

名古屋大学法科大学院における授業支援システムの現状

金子 大輔 菅原 郁夫

I. はじめに

2004年度に開設された法科大学院は、弁護士・検察官・裁判官などの法曹を養成することに特化した教育を行う専門職大学院です。名古屋大学にも同年、法科大学院が開設されました。法科大学院は、司法制度改革の一つとして導入されたものです。従来の司法試験という「点」のみによる選抜ではなく、法学教育・司法試験・司法修習を有機的に連携させた「プロセス」として法曹を養成することが目指されています。そのため法科大学院には、法律に関する基礎的な知識の他に、実務的な技能を習得するための教育を行うことも求められています。

しかし、法科大学院では3年（一部法学既習者は2年）という短い期間の中でそれらの教育を行わなくてはなりません。そのため各法科大学院では、より効率的に教育を行うためにさまざまな実践が試みられています。

名古屋大学法科大学院においても、各年次に理論教育科目と関連づけながら実務基礎科目を配置するなどのカリキュラム設計を行っていますし、また授業には、ソクラティックメソッドやケースメソッドなどの新しい教育方法を適宜導入しています。くわえて、コンピュータやインターネットなどのICT（Information and Communication Technology）を効果的に活用した授業や、それらの授業を支援するシステムの開発を行っています。このICTを活用した実践は、名大法科大学院の大きな特長のひとつといえます。

そこで本稿では、名大法科大学院におけるICT利用について、とくに授業支援に関わるシステムを中心に紹介します。まず、通常授業を支援する環境として「NLS シラバスシステム」「WebCT 短答式理解度確認システム」「お助け君ノートシステム」の3つのシステムについて説明します。つぎに、法科大学院の教育の中でも重要な教育の一つである、実務技能の教育を支援する環境について紹介します。ここでは、「模擬法廷教室」やそこでの活動を支援するシステムである「DRS」「STICS」に焦点を当てて説明します。

II. 法科大学院における授業支援環境

(1) NLS シラバスシステム

NLS シラバスシステム（Nagoya University Law School Syllabus System）は、授業の基本情報や概要、計画等のシラバス情報をインターネット上に提示することができるシステムです（図1）。それらに加えて、授業の各回のレジュメや電子資料を配布できるほか（図2）、課題提出機能や掲示板機能、匿名評価機能等を備えています。この匿名評価機能は、学生が提出した課題のレポー

トを、提出者名を匿名化して表示し、それらから優秀なものを選んで投票することができるシステムです。投票の際は、各レポートに匿名でコメントを付すこともできます。投票により順位が明確になるため、学生間でのレポートの相互評価が可能となります。現在、全科目において、全教官がNLSシラバスシステムを利用しており、授業概要・毎回の授業計画の公表、予習の指示等を行っています。

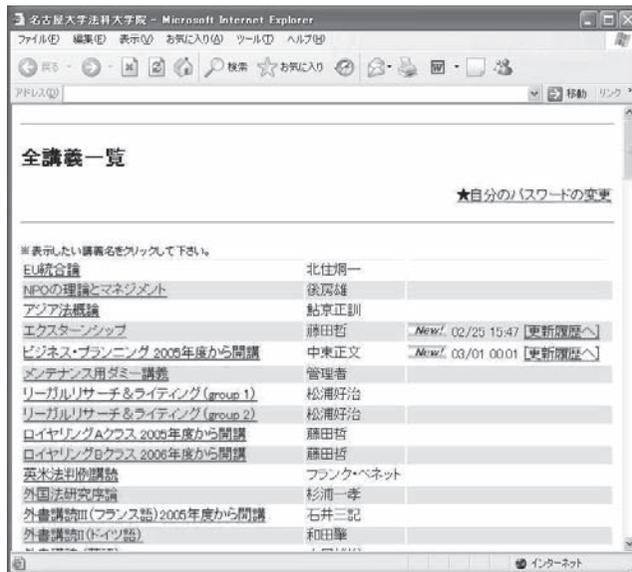


図1 NLS シラバスシステムイメージ (全講義一覧)

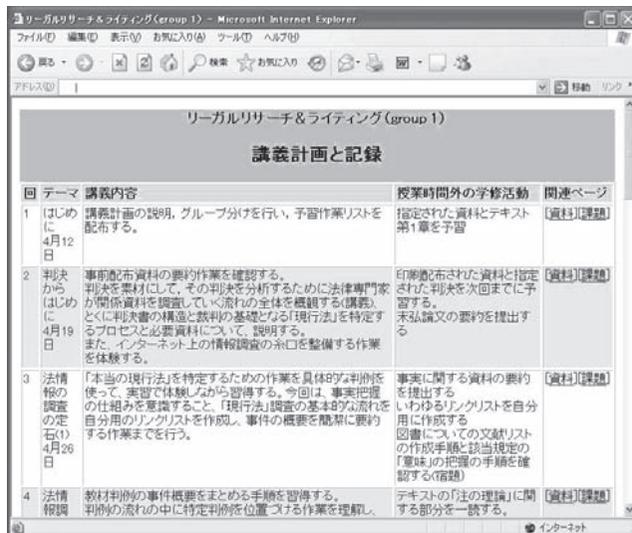


図2 NLS シラバスシステムイメージ (講義計画・記録)

(2) WebCT 短答式理解度確認システム (択一システム)

名古屋大学で導入している WebCT を利用して、WebCT のテスト機能を利用したドリル型の教材を作成し提供しています。現在提供しているのは、司法試験の形式を模した多肢選択型の問題です (図 3)。回答に対するフィードバックや成績管理をすることもできます (図 4)。このシステムを用いて、法学に関する基礎的な知識を自己確認することが可能です。とくに法律的な知識を短期間で覚えなければならない法学未習者にとって、このシステムは有効であると考えられます。

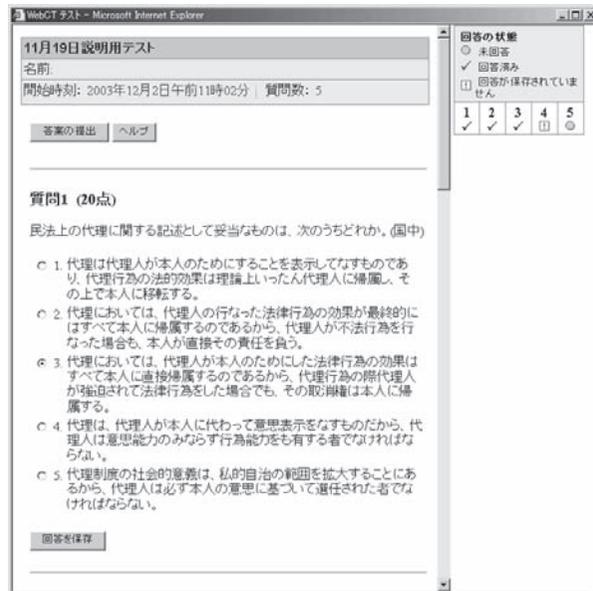


図 3 択一システム問題文提示画面

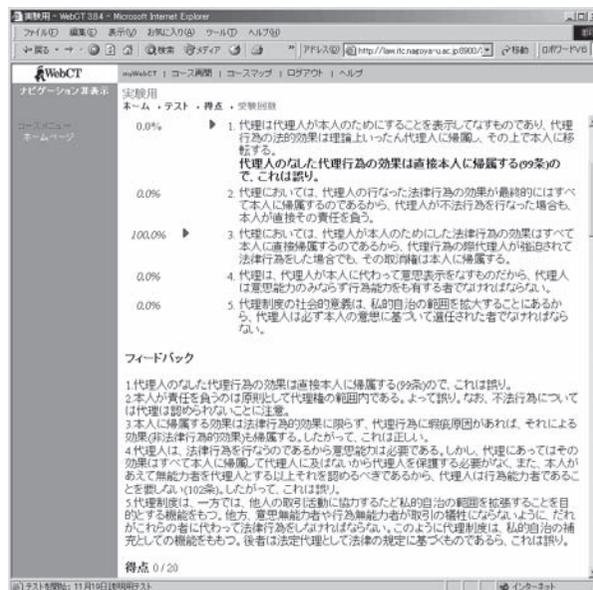


図 4 選択肢の解説とフィードバック画面

(3) お助けくんノート

授業の際、パソコン上で授業のノートを取りながら、必要に応じて「タグ」をつけておくことで、授業後に、収録された授業の該当場面を閲覧することができるシステムです（図5）。収録は授業と同時にされます。学生は授業のノートをパソコンでとりながら、「わからない」「もう一度確認したい」などと思った場面で、画面に表示されている「ボタン」をクリックしてノートにタグを付与します。授業終了後、そのタグをクリックすれば、タグを付与した時点の授業の様子を映像で閲覧することができるようになります。もう一度しっかり聞いておきたい場面や復習したい場所を効率的に検索でき、より深く授業を理解することが可能になります。

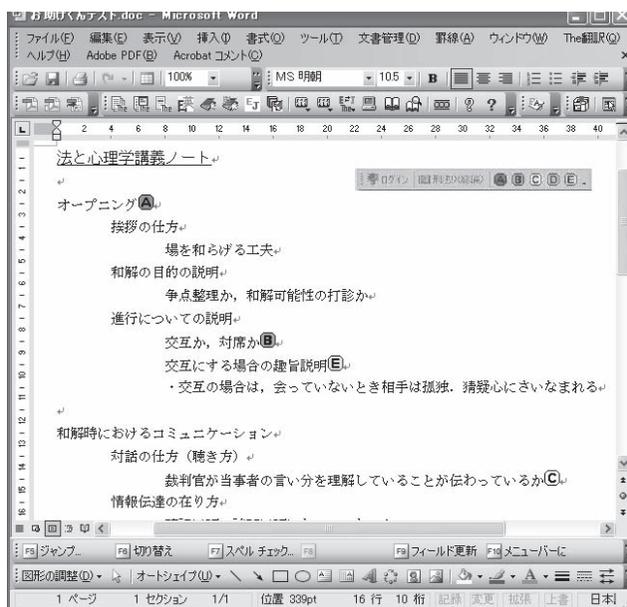


図5 お助けくんノートシステム（タグ付与済み word ファイル）

なお、以上の（1）から（3）のシステムは現在、文部科学省の法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム「自分の技量を随時確認できる多様な環境構築プロジェクト」の一部として開発を継続しています。それぞれの詳細については、ウェブサイト（<http://nls.nomolog.nagoya-u.ac.jp/>）をご参照ください。

Ⅲ. 実務技能教育のための環境

ここで述べるシステムは、上述のものとは異なり、おもに実務技能教育での利用に焦点を当てて開発されました。法律相談における面接技法や裁判での尋問技法などの実務的な技能は、通常の講義だけではなく、実際の経験をとおしてその教育を行う必要があります。その方法にはさまざまなものがありますが、例えばロールプレイなどのシミュレーション学習や、実際に弁護士事務所等で研修を行うエクスターンシップなどが一般的です。

これらの学習において大切なことは、その学習に対する自己評価であり、くわえて、他者（教

員や専門家も含む)からの評価がそれぞれの学生に適切にフィードバックされることです。そのための手法としては、例えば実習中または実習終了後に講評を行う、あるいは実習をVTR等で撮影しておき、後から再生して振り返るなどのものが考えられます。

名大法科大学院では、上述の手法を容易に実現でき、より効果的に実務技能教育を行うことのできる環境の構築を目指しています。以下、名大法科大学院で現在使用されている環境について説明します。

(1) 模擬法廷教室

名大法科大学院では現在、民事法廷教室(図6)、刑事法廷教室(図7)、円卓法廷教室(図8)の3つの法廷教室を利用できます。民事法廷教室は名古屋地裁の法廷を模して作られました。また刑事法廷教室は、2009年度までに導入される裁判員制度に対応できるよう、裁判官席を9席(裁判官3名、裁判員6名)設けてあります。そして円卓法廷教室は、調停や仲裁などのADR(裁



図6 民事法廷教室



図7 刑事法廷教室



図8 円卓法廷教室

判外紛争解決)に対応できるように作られたものです。

いずれの法廷教室にも、そこでのやりとりを収録できるシステム(DRS)を導入し、プラズマディスプレイなどを設置しています。また円卓法廷教室にはテレビ会議システムが導入されており、遠隔地とのやりとりも可能です。

(2) DRS

DRS(Digital Recording Studio)は、法廷教室における模擬裁判などの様子を記録するためのシステムです。教室には複数台のカメラとマイクが設置されており、それらを用いて撮影を行います。四方向からのカメラにより、裁判官席、被告(弁護士)席、原告(検察)席、証人席の映像をそれぞれ独立して撮影できます。これらの4つの映像に加え、各席に設置されたマイクの音声にあわせて自動的に切り替えを行い、発言のあった席を中心に収録した映像を撮影することも可能です。



図9 DRSによる5画面でのフィードバック画面

映像は専用のハードディスクに MPEG2 形式で保存されます。収録直後から記録された5つの映像を見直すことができるため、即時のフィードバックが可能です(図9)。またDRSは、映像の収録中に複数のインデックスを付すことができます。収録後に振り返りを行う際には、インデックスを用いて該当場面を容易に検索し提示することが可能です。現在はさらに、発言内容を自動で文字化し記録するシステムを開発中です。

(3) STICS

STICS (Stream Indexing and Commenting System) は、DRSの映像やビデオカメラで撮影したロールプレイの映像等を専用のサーバに登録し、それをインターネット経由で配信するシステムです。さらに、閲覧中の映像の任意の場面にコメントを付与することも可能です(図10)。配



図 10 STICS 映像・コメント閲覧画面



図 11 コメント一覧画面

信される映像は、事前に一定時間ごとのシーンに区切られており、コメントはそれぞれのシーンに対して付与されます。また付与されたコメントを一覧で表示することもできます(図 11)。コメントを付与した人物による抽出のほか、コメントが付されたシーンのサムネイルをクリックすることで、該当場面から再生を始めることも可能です。

なお、クライアントからアクセスする場合は、個別に発行される ID とパスワードを用いてログインします。各個人は複数のクラス(授業)に所属することができ、個別・授業別での管理が可能です。

STICS は、実務技能を場面として映像で収録したものをインターネット上で公開・共有できる点が最大の特長です。場所を問わず利用できるため、学外の専門家からコメントを受け取ったり、自宅で自分のパフォーマンスを振り返ったりすることが可能となります。またランダムアクセスが可能のため、必要な場面をすぐに再生できるほか、授業者が事前にシーンにコメントを付与しておくことで、当該場面の有する意義を学生に伝達しておいたり、コメントへの返信をとおしてオンラインで双方向的にやりとりを行ったりすることが可能です。

なお現在、名大法科大学院を中心に全国 13 法科大学院が協力し、模擬裁判や模擬法律相談等のシナリオや、それをもとにした映像素材を作成し共有するプロジェクト(PSIM プロジェクト、<http://psim.cyberlaw-nagoya.jp>)が進行中です。PSIM プロジェクトは、法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム「実務技能教育教材共同開発共有プロジェクト」の一環ですが、ここにおいても DRS や STICS が利用されており、これらのシステムが実務技能教育実践の蓄積・共有を支援しています。

IV. おわりに

以上、名大法科大学院で利用しているシステムについて、それぞれの概要を簡潔に紹介しました。これらのシステムを利用することで、例えば授業外の時間をより有効に活用したり、授業への参加意識が高まったり、体験を通じた実務技能教育が可能になったりすることが期待できます。さらに、それらの記録は文字や映像として残るため、今後の FD 実施や授業改善の契機ともなるでしょう。

その他、PSIM プロジェクトなどを利用し、法科大学院における教育に関するネットワークを他大学院にまで広げ、そこから良い実践を収集・蓄積していくことが重要であると考えます。そして、それらから得られた知見をもとに、法科大学院教育における新たな学習環境デザインを提案していくことが今後の課題です。

(かねこ だいすけ：名古屋大学大学院法学研究科)

(すがわら いくお：名古屋大学大学院法学研究科)